

教育実習における経験学習デザインの構築 ～ 教師教育者・現場コーチ・実習生の三者の成長～

光田 怜太郎（東京学芸附属高等学校英語科）

○ 臼倉 美里（東京学芸大学人文社会科学系外国語・外国文化研究講座英語科教育学分野）

大野 弘（東京学芸大学附属高等学校校長）

後藤 貴裕（東京学芸大学附属高等学校副校長）

小俣 岳（東京学芸大学附属高等学校英語科）

代表者連絡先：rmitsuta@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】教育実習 教師教育 実習生の変容 実習生の発達モデル

1 本プロジェクトの目的

教育実習は「大学」と「実習校」と「実習生」の三者がお互いにどのような関係で働きあっているかが、充実した実習になるかどうかの鍵となることは間違いない。東京学芸大学においては、「大学での事前指導→3年次に実習校での3週間の実習→大学での事後指導」というカリキュラムに基づき教育実習を展開しているが、この三者の関係を今一度見直し、教育実習期間のみならず、事前事後を含めた教育実習全体のカリキュラムおよび実習校での指導のあり方を見直したいと考える。本プロジェクトでは、東京学芸大学附属高校にて秋に行われる教育実習において大学と連携し、学生が事前、実習期間、事後を通してどのように変容するのかを追跡し、大学および実習校における教育実習指導の改善策を提案することをめざす。

大学と実習生間の課題として、大学の事前指導で実習校の多様な現状を十分には伝えきれていないこと、そして、大学の限られた授業時間内では実習生の指導技術を十分に鍛えることができないということが挙げられる。次に、大学と附属校間の課題として大学での事前指導に関する情報が附属校に十分に伝わっていないことから、実習生にどのような助言・指導をするべきか悩んだり、意図せずに大学での指導とやや乖離した指導をしてしまったりすることがある。附属校と実習生間の課題として、実習生の英語力や指導技術の個人差を考慮した指導・助言が行えるようにするための枠組み作りが求められていることが挙げられる。

本プロジェクトでは、大学と実習校が連携しやすいという教育学部附属校の特性を生かし、大学にて実習生を指導している教員1名と附属高校にて実習生を指導する教員2名が連絡を取り合い、附属高校教員が担当する実習生の事前、実習期間中、事後の学びや振り返りを観察をする。その方法を通し、教育実習のあり方のモデルの構築を目指す。また、先行研究ではあまり焦点が当てられていない実習生の指導技術の発達段階にも着目することにしたことも本研究の特色である。なお、本プロジェクトには1年目2年目とも4名の実習生の協力を得ることができた。

2 本プロジェクトの実施

「大学」と「実習校」と「実習生」の三者連携における課題解決のために、本研究では以下の3つの研究課題を設定した。

研究課題1：大学と実習校が共有すべき実習に関する課題意識を精査する

研究課題2：実習生の実習前後の変容を追跡する

研究課題3：実習生の指導技術の発達段階のモデルを作りそれに合わせた指導の在り方を提案する

研究課題1については、実習開始前に大学の授業担当教員と実習指導教員の二者で複数回、そして実習生も含めた三者でも複数回、事前カンファレンスを行い、議事録を書き起こし、実習に関する課題を精査した。1回あたりのカンファレンスは1時間から1時間半程度であった。また、実習生たちに、実習前までに大学で受講した授業の内容を振り返ってもらい、実習中に役立ったことや、もっと学んでおきたかったことについてコメントを寄せてもらった。

研究課題2については、実習生を対象に、実習の事前事後に自己評価アンケートを実施した。このアンケートには、JACET 教育問題研究会が作成した「言語教師のポートフォリオ、J-POSTL」の「英語教職課程編」を使用した。実習生は Google Forms を用いたオンラインアンケート形式で、96の項目について自らの到達度に関する意識を5段階で評価した。

さらに実習期間中に行った授業協議会の様子をすべてビデオ録画し、実習終了後に実習生にビデオを視聴してもらい、振り返りレポートを書いてもらった。この振り返りレポートには、ビデオ内の時間、実習生による自評、指導教員や他の実習生からのコメントを記載する欄に加えてそれらのコメントに対するその場での実習生自身の応答や、その後の授業で自分が改善したこと、そして「今振り返ってみて感じることを記入してもらった。

研究課題3については、複数回の事後カンファレンスを通し、まずは実習指導教員が主観的に実習生の発達段階を記述した。そして、その記述内容を、実習生の実習前後の自己評価アンケートや授業振り返りレポートの内容と照らし合わせた。その過程を経て最終的に観点別の基準と能力記述文から成る「発達段階モデル」を作成した。

3 成果と課題

研究課題1「大学と実習校が共有すべき実習に関する課題意識を精査する」について、大学、実習校、実習の三者のそれぞれが感じている実習に関する問題意識を事前カンファレンスを通して整理した。大学の方で感じている課題意識としては、実習生に対しては授業の「稽古不足」が挙げられた。ただし、これは必ずしも実習生の努力不足だけが原因ということではなく、十分に稽古のための授業時間を確保できないという現行のカリキュラムの問題でもある。また、実際に教壇に立ったがゆえに気づいた実践的な学びを多く積み重ねてほしい、またその際生じる失敗に対してはある程度の理解を示した上で指導をしてほしい、という声があげられた。

研究課題2「実習生の実習前後の変容を追跡する」について J-POSTL の自己評価の結果を分析した結果、96 項目からなる平均点の推移について、実習の事前と事後を比較すると、点数が概ね上昇していることから、3 週間の実習を通して実習生の自己評価に伸びが確認できた。また、5 段階の自己評価の値が「1」あるいは「2」上がった数と、逆に「1」あるいは「2」下がった数を比較してみると、自己評価が上がった項目数の方が明らかに多いことが見て取れた。このことから、実習生の自己評価が実習を通して上がっていることが確認できる。

また、実習生が自分の授業協議会のビデオを実習後に見直し、自らの学びを振り返って書いたレポートについて、そこから見えた変容の一例を取り上げる。英語の力は十分にある学生でありながら授業で英語を用いることについてプレッシャーがあり頑張って英語を使うのだが、生徒が理解できないような難しい単語の使用が見られた。これは、自分が英語を使うということに精一杯で生徒が理解できるかどうか意識が向いていなかったということであり「生徒に英語を使わせて英語力を伸ばす」という目的を意識する余裕がない様子がうかがえる。授業に慣れてくると授業の目的を意識できるようになるが、生徒にスピーチの原稿を書かせたりする際にポイントの提示などをしておらず、漫然とした指示のため生徒がとまどうなど、まだ生徒目線で考えられていない点があったり、授業中に自由に活動させすぎて緊張感がなくなったりする場面もあった。これに対し実習生は、その時間で計画した内容を終わらせればよしと考えており、生徒がその授業で何を学んだか、ということに意識が行っていなかったと振り返っている。このような振り返りを繰り返していくうちに説明など一方通行でなくインタラクションを取りながら生徒の様子を観察しよう意識し、実際にそのようにできるようになっていった。やがてクラスの中で作業が進んでいない生徒に対しても意識を向けることができるようになり、生徒を褒める際も何が良かったのか具体的に指摘できるようになり、モデルも漠然と示すのではなく生徒に学び取ってもらいたいポイントを具体的に強調して伝えることができるようになった。そして最終的にはそのようになるために何が必要か、ということを考えること、すなわち自分を客観視することの必要性を認識するようになった。このような実習生について本人の振り返りを通して作成した変容の記録は貴重なデータであるといえるだろう。

研究課題3「実習生の指導技術の発達段階のモデルを作りそれに合わせた指導の在り方を提案する」は、先の実習生の変容の記録を本プロジェクトに参加した実習生をもとに「実習生の指導技術の発達段階のモデル」を作成した。モデル作成にあたってまず、「授業設計力」「授業実行力」「生徒理解力」の3つの観点を設け、それぞれについてABCの3段階で包括的評価を行うことを想定した。3つの観点的定義は以下の通りである。

観点1「授業設計力」：目標や目的を意識しながら個々の活動を組み合わせて授業を組み立てていく力

観点2「授業実行力」：授業中の生徒の様子に合わせて、臨機応変に計画した内容を調整する力

観点3「生徒理解力」：授業を設計・実行する過程で、常に生徒の実態を見取り、それを授業に反映する力

さらに3観点のABC評価の結果を踏まえて4つの発達段階のステージを設け、それぞれについて能力記述文を付し「発達段階モデル」を作成した(表1)。

表1 実習生の指導技術の発達段階のモデル

ス テ ー ジ	観点1 授業 設計力	観点2 授業 実行力	観点3 生徒 理解力	能力記述文
1	C	C	C	【そもそも授業が成り立っていない】 個々の活動をこなすことに意識が向いており、授業全体の目標に基づいた授業設計ができていない。また、指導案通りに授業を展開できない。
2	B	B	C	【指導案通りに授業はできている】 授業全体の目標や、個々の活動の目的を意識するようになる。指導案通りに授業を展開することはできるが、生徒目線での授業設計・指導には至っていない。
3	A	A	B	【生徒目線で考えられるようになってきている】 授業全体の目標や、個々の活動の目的を理解した上で授業設計ができるようになる。生徒目線で考えられるようにはなるが、実際の授業に反映するには至っていない。
4	A	A	A	【生徒の実態に合わせて授業を設計・展開できる】 自らの働きかけが生徒に与える影響について考えたうえで、生徒目線での授業設計・展開ができるようになる。

このモデルは、実習生を格付けすることを想定して作ったものではない。そうではなく、実習を担当する現場の指導教員が、実習生がどのステージにいるかを把握し、発達段階に合った目標設定や助言をするためのツールである。現場の指導教員は、往々にして高い理想の教師像を実習生に求めることがあるが、初めて教壇に立つ実習生に対してそれは厳しすぎる要求である。この発達段階モデルを指導教員が理解していれば、そのような実態を無視し現実的でない指導をすることはなくなるだろう。同時に、指導教員自身の授業改善のきっかけになることも期待できる。

本プロジェクトでは、「大学」「実習校」「実習生」三者の関わりの課題について考え、そこから実習生の変容を追跡することで実習生の発達モデルを提案するに至った。実習生の発達のモデルを教育実習に関わる大学および実習校の教員が共通して理解することで、三者の関わりに関する課題の改善や教育実習カリキュラムおよび現場での指導が有意義になるということは十分にあり得ることである。本プロジェクトによって得たデータは今後も検証し、そこから得られる教育実習のあり方を広く提議していきたいと考える。